

18	豊田	飯野小学校	モリオカ シンヤ
			氏名 森 岡 進 弥

分科会番号	18	分科会名	情報化社会の教育
-------	----	------	----------

研究題目

切実感をもって課題を設定し、経験を織り交ぜ、
受け手を意識した情報を発信できる子の育成

— 第4学年 総合的な学習の時間 「飯野の環境 これでもいい？ エコアクションプロジェクト」 —

研究要項

I はじめに

現代社会は、インターネットの普及により、膨大な情報に溢れている。メディアコンテンツが急速に発展し、YouTube や TikTok、Instagram などの情報発信の手段が多様化している。そのような社会を生き抜いていくためにも、情報が正しいものなのか判断したり、自分にとって必要な情報かどうか取捨選択をしたりする情報活用能力が必要となる。

GIGA スクールが始まって、ICT 機器を使った学びの場も急速に発展した。子どもたちの学びの場においても、ICT で、探究的な学びが充実し、情報収集の手段も情報発信の手段も多様化している。

本学級でも、国語科「クラスの生き物図鑑」の学習で、本やインターネットを活用して情報収集し、情報を発信する探究学習を行った。調べて分かったことを本から引用し、発表している児童もいたが、なんとなくテーマを決め、インターネットで検索してきたデータを鵜呑みにし、そのまま書き写し、従来どおりのアナログに近い形で、情報発信をしてしまっている子も見られ、子どもたちの課題設定能力と情報活用能力の未熟さが伺われた。

学習指導要領「総合的な学習の時間」の目標の中にも、

- (2) 実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。

(3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

と記述されている。この2つの目標が本学級の子どもたちに必要な能力ではないかと考えた。情報活用能力だけでなく、地域の未来を担う人材として、地域の課題に目を向け、自分で主体的に課題を立て、情報を集め表現し、地域に還元して、社会参画できるようになって欲しい。

以上の実態を踏まえ、多様化していく情報社会の中で生き抜くために、自ら切実感をもって課題を設定し、主体的に情報を収集し、自分の知識や経験を織り交ぜて、まとめ、発信をしていく力を育てていきたいと考え、研究主題を設定した。

II 研究の内容

(1) めざす子ども像

切実感をもって課題を設定し、経験を織り交ぜ、受け手を意識した情報を発信できる子

(2) 研究の仮説と手立て

仮説1

教材との出会いの場において、地域と協働した学びの場を提供することで、切実感をもって課題を設定し、地域の課題に対して、経験を織り交ぜながら情報を発信することができるだろう。

手立て① 地域の課題に着目させるための、地域と協働した学習の場の設定

絶滅危惧種やホタルが見られる清流、環境学習プログラムがある企業など、地域には子どもたちのための学びの場が充実している。学習の導入の場において、地域と協働した学びの場を提供することで、様々な地域課題に気付くことができ、自らの興味や関心に合わせ切実感をもった学習課題を設定することができるだろう。

手立て② 情報収集の場における体験活動の充実

情報収集の場において、体験活動を多く取り入れることで、体験で得た知識を上手に活用すれば、実際に体験をしたという根拠ある確かな情報が発信できるようになるだろう。

仮説2

発信の場において、子どもの願いや思いに合わせた受け手を選択させることで、受け手を意識した情報発信

信をすることができるだろう。

手立て③ 情報発信の場における子どもの願いや思いに合わせた受け手の設定

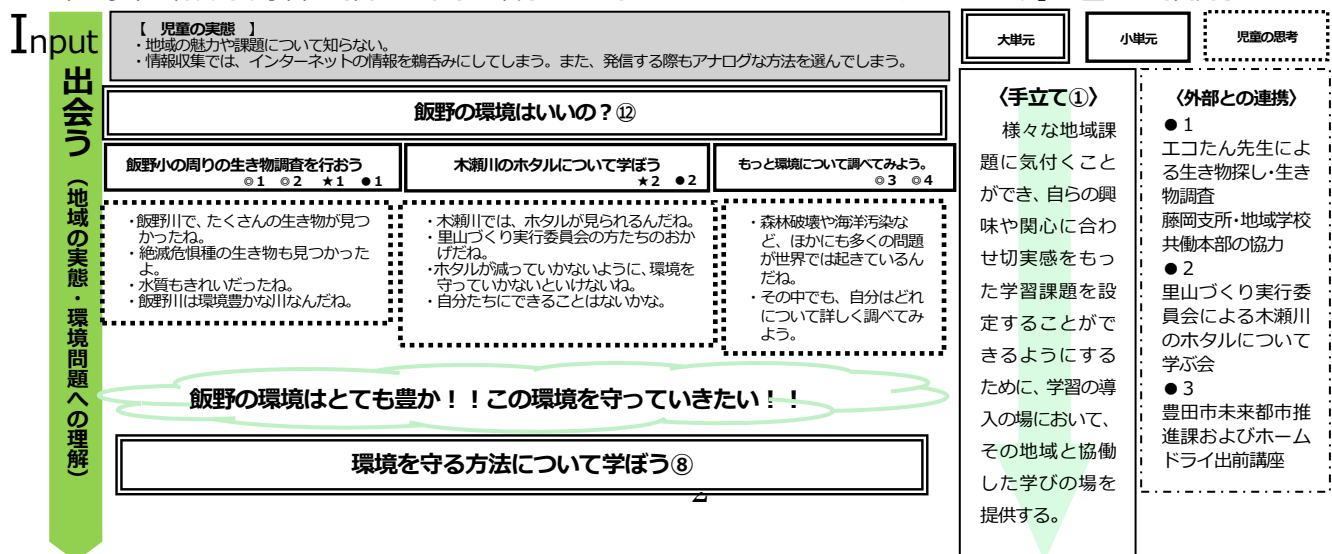
情報を発信する場において、情報の受け取り手を、子どもの願いや思いに合わせた相手に設定する。子どもの願いや思いのある受け手であれば、相手意識が生まれ、伝え方や表現の仕方を考えることができ、受け手を意識した情報発信をすることができるだろう。

(3) 抽出児童

	児童の実態	期待する姿
児童 A	- 地域の魅力や課題について知らない。 - 情報収集では、インターネットの情報を鵜呑みにしてしまう。また、発信する際もアナログな方法を選んでしまう。	- 地域の魅力と課題について気付き、自ら課題を設定して、主体的に取り組もうとする姿 - 実体験から経験という根拠を織り交ぜ、受け手を意識した情報を発信することができる姿

(4) 単元計画

第4学年 総合的な学習の時間 「飯野の環境 これでもいい？ エコアクションプロジェクト」 全52時間完了



水を守る方法について学ぼう ★4 ●3	アイシン藤岡工場ではどんな取り組みをしているのだろう ●4	豊田の環境はどうだろう？ ●5
・ホームドライでは、水を完全にきれいにしてから、下水に流しているんだね。 ・基準がとても厳しいけど、それをしっかり守っているんだね。 ・自分たちはどうだろう。 ・生活を見直さないといけないね。	・アイシン藤岡工場では、分別を豊田市の基準よりも、細かく設定して行っているんだね。 ・下水に流す水もすごく厳しく検査して行っているね。 ・工場から出るごみもできるだけ、でないように工夫をしているね。 ・自分たちもエコアクションをしないと。	・SDG s ファシリテーターさんのお話だと、豊田は日本一 SDG s を意識しているんだね。 ・1 位をキープしたいね。

環境のために、自分たちにできることを考えよう！！

「エコアクションプロジェクト」自分たちにできることを考えよう②

エコアクションに取り組んでみよう ●5 ●7	今の地球の環境はどうだろう？ ●6
・自分たちもエコアクションをしないと。 ・自分たちだけでは、解決しない。みんなに協力してもらいたいね。 ・呼びかけるポスターを作ったり、劇をしてみたりするのもいいかもしれないね。 ・自分たちでもエコ実験会やエコ体験会ができるといいよね。自分たちが体験したことを他の人たちにも伝えてみたい。	・今年の夏も暑かった。地球の温暖化がどんどん進んでいるから、異常気象が起きているんだね。 ・自分たちだけでは、どうにもならないよ。みんなで作らないと。

自分たちだけでなく、多くの人たちにも協力してもらおう

エコアンバサダーチーム ●5	エコアクションチーム ●5 ●8	エコクリエイターチーム ●5 ●7
・自分たちが学んできたことをもっと多くの人にも知ってもらいたいね。 ・まずは学校。次にお家の人や地域の人にも知ってもらいたいね。 ・近くで協力してくれる会社と、地域の人はいらぬかな。色々と調べてみよう。	・エコアクションをみんなが行えるように、エコアクションウィークをもうけるのはどうかな。 ・エコアクションチェックシートを作るのはどうかな。 ・ごみの分別をしっかりと行えるように、呼びかけに行くのはどうかな。	・呼びかけるためにポスターを作りたいね。 ・SDG s ファシリテーターさんに教わった紙漉きで、しおりを作ろう。給食の牛乳パックをリサイクルしてみよう。 ・しおりにエコについてのメッセージを添えてみてほしいかもね。

〈手立て②〉

情報収集の場において、体験活動を充実させることで、経験を織り交ぜた、情報を発信することができる。

〈手立て③〉

受け手を意識し、伝え方や表現の仕方を工夫した情報発信をすることができるようにするために、情報の受け取り手を、子どもの願いや思いに合わせた相手に設定する。

〈ICT の活用〉

- 1 タブレット「写真」機能
- 2 Teams による生き物写真の共有
- 3 SKYMENU 発表ノートによる思考ツール「ペンタゴンチャート」
- 4 タブレットによる検索と SKYMENU 発表ノートまとめ
- 5 Canva、アイビスペイント、ワードを使ったポスター・動画・絵本づくり

●4
アイシン藤岡工場見学

●5
未来都市推進課豊田 SDG s ファシリテーターによるSDGs 教室

●6
地球温暖化教室

●7
未来都市推進課豊田 SDG s ファシリテーターによるエコアクション講座

●8
藤岡支所への報告会

●9
JA へのキャップ議渡会

〈他教科との関連〉

- ★1 理科
「1年間の観察」
道徳科
「小さな草たちに大きな拍手」
- ★2 国語科
「話を聞いて質問をしよう」
社会科
「住みよい暮らしをつくる（ごみのしりと利用）」
- ★3 理科
「天気と気温」
算数科
「折れ線グラフ」
国語科
「広告を読み比べよう」
- ★4 社会科
「住みよい暮らしをつくる（水はどこから）」
- ★5 国語科
「『和と洋新聞』を作ろう」
国語科
「調べたことを報告しよう」
国語科
「お願いやお礼の手紙を書こう」

Feedback

振り返る・生かす

学習したことを知ってもらうために、発表会を開こう

エコ博覧会を開こう②
エコ博覧会を開いて、環境について多くの人に知ってもらおう ★5 ●9
・多くの人に地球環境のことやエコアクションのことを伝えることができた。 ・これから自分たちでも、地域の環境や地球のためにできることを続けていきたいね。
これからの自分たちの生活について見直そう

飯野の環境のため、地球のために、学んだことを続けていこう

目指す子ども像：切実感をもって課題を設定し、経験を織り交ぜ、受け手を意識した情報を発信できる子

Ⅲ 研究の実際

(1) 手立て① 地域の課題に着目させるための地域と協働した学習の場の設定

第1時では、飯野小学校の周辺に流れる飯野川について目を向けることにした。飯野川は、地区の方々によって定期的に環境整備がなされ、桜の木が鑑賞できたり、川に入って遊ぶことができたりする地域に愛されている川である。そのような飯野川を単元の出会いの場として、NPO法人びすたーり代表の高山博好氏をゲストティーチャーとして招き、飯野川の環境調査を行うことにした。児童Aは、高山氏と環境調査をしていく中で、絶滅危惧種に指定されているホトケドジョウやヨシノボリなどの希少生物も仲間と共に見つけることが

でき、飯野川はとてもきれいな川であり、地域の人々の努力によってその環境が守られていることを知ることができた。その後の講義では、高山氏から「絶滅危惧種を見ることができる清流の飯野川を10年後、20年後にどんな姿になってほしいか」と問いを投げかける場面があった。そんな投げかけに対して、児童Aは、「生き物がたくさん見られる飯野川を大切にしたい。環境のために自分たちにできることを考えたい。」とワークシートに記述した。この記述から、児童Aは飯野川の魅力や価値を実感するとともに、その環境を守り続けていくためには何らかの取組が必要であることに気づき、地域の環境に関わる課題へと目を向け始めている様子が見られた。（資料1）

今日の環境調査で、生き物がたくさん見られる飯野川を大切にしたいと思いました。環境のために自分たちにできることを考えたいです。

< 資料1 児童A 環境調査の振り返り >

第2時では、飯野川と同様に、学区に流れる木瀬川にも目を向けることとした。木瀬川は、毎年、ホテルを見ることができる清流であり、その生育と環境づくりを行っている方々をゲストティーチャーとして招き、日々の活動について話を聞くこととした。毎年、地区外からも多くの方々が訪れ、ホテルの鑑賞を楽しまれていることを教えていただいた。一方で、環境が年々悪化していること、ホテルを生育する後継者がいないことも課題だと教えていただいた。児童Aはゲストティーチャーの話を聞いて、「木瀬川のホテルが多くの人に楽しまれていることを知った。飯野川だけでなく、木瀬川も大切にしたい。飯野の環境を守るためにできることはないか調べてみたい」と振り返りに書いており、地域の課題に関心を高めるとともに、次時の学習への意欲を読み取ることができた。（資料2）

木瀬川のホテルが多くの人に楽しまれていることを知ることができました。飯野川だけでなく、木瀬川も大切に、飯野の豊かな環境を守るためにできることはないか調べてみたいと思いました。

< 資料2 児童A 木瀬川ホテルについて聞いた振り返り >

第3時では、飯野川や木瀬川といった身近な環境について学んだことを基に、学習をさらに発展させ、世界で起きているさまざまな環境問題へと関心を広げていくこととした。まず、環境問題から想起される事柄について個々でイメージマップを作成した。これにより、児童一人一人がどのような問題に関心をもちているのかを可視化することができた。ペンタゴンチャートを活用し、「自分にできること」「日本での様子」「他の生き物は大丈夫か」などの視点から自分が探究したい課題を整理し、各自が調べてみたい環境問題を設定した。（資料3）



<資料3 児童A ペンタゴンチャート>

児童Aは、海洋汚染の問題に着目し、特に年間の海のごみの量が増え続けている現状について調べ学習を進めた。調べる過程で、「自分たちの生活から出るごみが積み重なり、年々海に流れ込む量が増えている」ことに気づき、「このままでは海がごみであふれてしまうかもしれない」といった危機感をもつようになった。このように、身近な生活と海の環境問題を結び付けて考えることで、児童Aは問題をより自分事として捉える様子が見られた。

（2）手立て② 情報収集の場における体験活動の充実

第13時では、飯野学区内の企業である株式会社アイシンの工場見学会を行った。そこでは、アイシンが環境のために、取り組んでいるエコアクションについて教えていただいた。（資料4）株式会社アイシンでは、持続可能なエコアクションの実現のために「無理なく、無駄なく」というキーワードで、自分たちにできることを考えてエコアクションを行っていることを教えていただいた。その見学後の振り返りで、児童Aは、「無理なくできるエコ



<資料4 児童A アイシン工場見学>

アクションを行いたい、何をしたいかわからない」と記述しており、新たな課題に直面している様子が伺えた。(資料5)そこで、豊田市未来都市推進課のSDGsファシリテーターを再度、招き、「無理なく、無駄なく」をテーマにしたエコアクションで、学校で行えることはないか教えていただくことにした。SDGsファシリテーターからの助言で、給食の牛乳パックを捨てていることについて注目し、その牛乳パックを使って、紙漉きをし、新しい紙を作るのはどうか提案をしていただいた。その後、SDGsファシリテーターと共に、紙漉き体験を行った。(資料6)紙漉き体験を行っていく中で、新たに作った紙を使って、何ができるか考えるように声をかけたところ、児童Aは、地域の図書館ボランティアの方々がかかるしおりを思い出し、「小さく切って本のしおりを作るのはいかがでしょうか」と提案した。その理由として「無理なく、無駄なく」という体験から小さく切るだけで簡単にできる方法であると説明した。(資料7)児童Aが過去の体験から新たな気付きを得て、学級全体に意見を広める様子が見られた。

(3) 手立て③ 情報発信の場における子どもの願いや思いに合わせた受け手の設定

作成した本のしおりをどのように生かすかについて、学級全員で話し合った。はじめは、下学年の児童や家族に伝えたいという意見も見られたが、単元の導入において地域課題に着目してきたことを想起し、学習してきた内容を地域に発信したいという思いが高まった。そこで、児童Aは「地域の多くの人に知ってもらうために、藤岡交流館に依頼するのはどうか」と提案し、学級として藤岡交流館へ発信することが決定した。

依頼先が決まった後は、自分たちの学習内容を事前に指導し、使えるようになっていたWordやCanva、アイビスペイントなど、自分に合ったツールでポスターにまとめる活動を行った。読み手が地域の大人であることを意識し、児童Aはレイアウトを見やすく整えたり、漢字を多く用いたりするなど、伝わりやすさを考えて試行錯誤する姿が見られた。はじめは手描きで作成していたが、より見やすく整ったものを作りたいという思いから、途中でタブレットを活用した作成へと切り替えた。最後まで読み手が大人であることを意識しながらポスターを完成させることができた。(資料8)

また、発信活動を進める中で、児童からは「伝えるだけでなく、自分たちも環境のために行動したい」という意見が出されるようになった。

その際、学校や地域でペットボトルキャップの回収活動を見たことがある児童や、家庭で実際にエコキャップを集めている児童の経験から、「みんなでエコキャップを集めてみてはどうか」という提案がなされた。話し合いの結果、学習した内容を広めるだけでなく、環境を守るための具体的な取組として、学校全体に向けたエコキャップ回収活動に取り組むこととなった。

そこで、本のしおりと交換にエコキャップを集める活動を行った。その際のポスター作成にはCanvaを活用

今日の見学で、アイシンさんが無理なく、むだなくエコアクションを行っていることが分かりました。自分たちも無理なくエコアクションをしてみたいけど、何をしたいかわからないので、調べてみたいです。

＜資料5 児童A アイシン見学のふりかえり＞



＜資料6 給食の牛乳パック紙漉き体験＞

T: みんながつくった紙漉きの紙を何かに使えないかな。
B: 絵をかいいたり、文字をかいいたりするのはむずかしそう。
A: 図書館ボランティアさんがくれる本のしおりはどうかな。小さく切って、本のしおりにできそうだよ。切るだけならむずかしくないし。
C: 紙によって、大きさに違いがあるし、切って使うのはいいアイデアだね。

＜資料7 授業記録 児童Aの気付きの様子＞



＜資料8 児童Aが作成したポスター＞

し、児童Aは下学年にも分かりやすく伝わるよう、言葉やレイアウトを工夫しながら作成した。**（資料9）**こうした活動により、多くの児童からエコキャップが集まり、集めたエコキャップは地域の企業であるJAへ寄付した。寄付されたエコキャップがワクチンへとつながることを知った児童Aは、「自分たちの行動が遠くの人々の命を守ることにつながる」と実感する様子が見られた。これらの活動を通して児童Aは、環境を守る取組が人々の健康や生活の向上につながっていることに気が付き始めた。また、これまでの学習で得た視点と関連付けながら、身近な学校での行動が地域や社会へと広がっていくことを実感することができた。



＜資料9 児童AのCanva作成ポスター＞

（資料10）

5 研究のまとめ

（1）仮説1について

地域と協働した学習や体験活動を取り入れたことで、児童Aは地域の環境を身近な問題として捉えながら学習を進めることができた。飯野川や木瀬川での環境調査や、地域で活動する方々との交流を通して、地域の自然環境が多くの人の努力によって守られていることに気付き、「環境を守りたい」「自分たちにもできることを考えたい」という思いをもつことができた。また、企業見学や紙漉き体験では、「無理なく、無駄なく」という考え方を基に、自分たちにできる環境保全の方法を考え、本のしおり作りやエコキャップ回収活動へと発展させることができた。これらのことから、地域と協働した体験活動は、課題を自分事として捉え、主体的に探究しようとする態度を育成する上で有効であったと考えられる。

読む人が大人だったので、手がきよりもきっちりしたレイアウトがいいと思い、工夫しました。地域の多くの人に読んでもらいたいです。エコキャップの活動では、**自分たちの行動がワクチンにつながり、遠くの人々の命を守ることに役立つと知って、とてもうれしかったです。**

＜資料10 ポスター作成後の児童Aのふりかえり＞

（2）仮説2について

情報発信の場において児童の願いや思いに応じた受け手を設定したことで、児童Aは相手意識をもって表現方法を工夫することができた。地域住民へ向けたポスターでは、見やすい構成や表現を意識し、全校児童へ向けたエコキャップ回収の呼びかけでは、下学年にも伝わりやすい言葉やレイアウトを工夫していた。また、ICTを活用することで、情報を整理しながら効果的に伝える姿も見られた。さらに、自分たちの発信や取組が地域や社会へと広がっていくことを実感し、学びの価値をより深く認識することができた。これらのことから、受け手を明確に設定した情報発信の場は、表現力や発信力の向上に有効であったと考えられる。

（3）成果と課題

本実践を通して、児童Aは地域の環境から世界規模の環境問題へと視野を広げ、自ら行動しようとする姿を見せるようになった。一方で、学習が進むにつれて探究のテーマが広がったことで、単元の出発点であった地域課題とのつながりがやや見えにくくなる場面も見られた。また、情報発信の活動についても、発信後に受け手からの反応や評価を得る機会が十分ではなく、自分たちの取組がどのような影響を与えたのかを振り返るまでには至らなかった。

今後は、各活動後の振り返りや対話の場を意図的に設定し、地域の環境と探究内容との関連を繰り返し整理することで、課題意識をより深められるようにしたい。また、地域住民や全校児童など、受け手からの感想や意見を取り入れる機会を設け、発信と受信の双方向的な学びを充実させることで、学習で得た気付きや行動を継続的な実践へとつなげていく必要がある。